

評・三浦 佑之 (古代文学研究者)
立正大教授

よく知られていることかもしれないが、東京の渋谷駅前広場の銅像・忠犬八子公は戦後になって造られた2代目で、1934年に建てられた初代八子公は不足した金属回収の対

愛され続ける難しさ

は新聞記事や美術雑誌などを総ざらいするかたちで調べ上げ、同時代の芸術的な評価も加えて丹念に記述する。写真も多く親切な本だ。

私の専門にかかわることなのにまったく知らなかったのだが、近代の銅像として最初に造られたのは、日

本武尊像だという。それは1880年に铸造され、今も金沢市の兼

六園に立っている。西南戦争で犠牲になった石川県人を慰霊する目的で造られたというが、だれが日本武尊像でと言いつ出したのか。それにしても、下服しもふくれの童子像が、古代からは隔たった着流しのような姿で立っているのはどうにも噴飯ものである。

一方、東京・上野の山に立つ西南戦争の主役が、銅像には似つかわしくない浴衣を着せられたのは、賊軍の将であったゆえか、はたまた野蠻な熊襲くまそうというイメージを付与しようともしたのである。原型の製作は、かの高村光雲である(犬は別人の作)。功成り名を遂げたので銅像を造りたいとお考えの方がいたら、発注前にぜひ本書をお読みいただきたい。いつまでも愛され慕われる銅像でいるのは、存外難しいものだというところに気づかれるだろう。

◇ひらせ・れいた1966年生まれ。姫路市立美術館学芸員。共著に『戦争のある暮らし』など。

平瀬礼太著

銅像受難の近代



吉川弘文館
4200円

象となって供出され、国鉄の浜松工機部で溶解されて機関車の部品になった。44年のことである。

神戸市の湊川神社(楠木正成を祀る)の境内にあった伊藤博文の銅像は、05年9月7日、日露講和条約の締結を不満として集結した群集に引き倒され、市中引き廻しのうへ壊された。伊藤がハルビン駅で暗殺された4年前のことであった。

近代になり、西欧を模倣してさまざまな銅像が建てられ、それぞれの運命をたどった。鋳潰されたり破壊されたりして姿を消した像は多く、理由もさまざまである。その一体一体の建立の由来とゆくえとを、著者